新居浜市立別子銅山記念図書館
令和６年度
別子銅山に関する本の解説講座

『銅山峰を仰いで』ファイナル　― 嶺北の遺構を中心として―

令和６年４月１４日
山村研究会　高　橋　利　光

Ⅰ　銅山峰周辺（嶺北）を散策しましょう

１　落し（おとし）エリア

（１）落し橋

落し橋（遠登志橋）

・鋼鉄製アーチ橋である橋長 48.25m、幅員 2.4mの落し橋は、明治 38 年（1905）に別子鉱業所土木課が架設した。
※遠登志橋（登録名）は、平成 17 年（2005）登録有形文化財に。

（２）遠登志橋（おとしはし）

・ワイヤーロープ吊り橋である橋長 50.0m、幅員 2.0mの遠登志橋は、平成 5 年（1993）に新居浜市が架設した。

（３）第二次泉屋道（いずみやみち）と石ケ休場（いしがやすば）

第二次泉屋道・長尾の石ケ休場

・第二次泉屋道は、元禄 15 年（1702）に開設され、約 200～300 名の仲持ち（人力運搬夫）が、銅山からの荒銅（粗銅）や口屋からの生活物品を搬送した輸送路。
・石ケ休場は、仲持ちが背負子を背負ったまま（立ったまま）休憩できる、簡易で効率的な休憩所、道中には複数あった。
・落し～東平（とうなる）間の第二次泉屋道は、昭和 43 年（1968）の東平撤退まで、鉱山関係者とその家族が生活道として利用、現在は、赤石山系への登山道となっている。

２　東平（とうなる）エリア

（１）東端索道（とうたんさくどう）のセリ割隧道（せりわりずいどう）

東平の東端索道セリ割隧道内部

・型式　　ドイツ国　ブライヘルト複線式
・運搬量　　67.5ｔ/ｈ
・延長　　2,717m（東平～端出場）
・高低差　　545m
・搬器積載量　560ｋｇ
・設置年月　　明治 38 年（1905）7 月
・廃止年月　　昭和 43 年（1968）9 月

（２）ペルトン水車設置跡地

東平・辷坂のペルトン水車設置跡地

・ペルトン水車とは、落差の大きい地点の発電所に使用される衝動水車のこと。
・ペルトン水車は、多数のわん形のバケットに、ノズルから噴出されたジェット水流を衝突させて回転させる方式。
・明治 28 年（1895）に設置された東平・中ノ橋のペルトン水車は、主に第三通洞開削削岩機用の電力を確保するために利用。
・ペルトン水車は、端出場水力発電所でも使用されている。

東平・辷坂の第二通洞（児島案）

（３）第二通洞（児島案）

・住友別子鉱山史上、第二通洞は２か所（東平・辷坂（すべりざか）：標高約 700mと寛永谷：標高約 955m）で開削に取り組んだが、いずれも中止された。
・東平・辷坂の第二通洞は、当時の土木課長・児島芳次郎の上申により、明治 20 年（1887）に開削着手された。
・第二通洞（児島案）は、明治 22 年（1889）、人力による開削の限界と換気の悪化により開削中止、再開されることはなかった。

坑口の隙間から見た第三通洞内

（４）第三通洞

・第三通洞は、柳谷川と寛永谷川が合流し足谷川（(あしたにがわ)：悪し谷川）となる東平・第三の地・標高 747mに開削された。
・明治 35 年(1902)、東平坑口から東延斜坑底まで延長 1,795mが 8 番坑道レベルで開通、坑内水を排水する坑水路も併設した。
・明治 44 年（1911）開通の日浦通洞（日浦坑口～東延斜坑底：延長約 2,120m）とも連絡し、端出場水力発電所への導水路も併設。

３　角石原（かどいしはら）エリア

第二次泉屋道・馬の背番所跡地

（１）第二次泉屋道（馬の背）

・元禄 15 年（1702）開設の第二次泉屋道は、足谷山から銅山越、角石原、馬の背（番所）、東平、落し、立川渡瀬（中宿）を経由して、新居浜口屋へと至る約 18ｋｍの人力輸送路。
・第二次泉屋道の難所は、急こう配の狭い尾根筋を歩かなければならない嶺北の馬の背と呼ばれたところ。（角石原から東平まで）
・道中の安全祈願のため、要所には地蔵が祀られている。

上部鉄道・角石原停車場跡の雪景色

（２）別子鉱山鉄道上部線（角石原停車場跡地）

・標高約 1100mの角石原は、第二次泉屋道や牛車道の中宿が置かれるなど、嶺北における交通の要所であった。
・明治 26 年（1893）上部鉄道開設時の停車場（駅）は、角石原、一本松、岩井谷、石ケ山丈の４停車場。（のち岩井谷は廃止）
・角石原には、選鉱場、焼鉱窯などの鉱山施設や目出度町の小泉商店「伊予屋」の支店や茶屋など商業施設もあった。

※輸送能力：仲持ち 40kg/人 → 牛車 340kg/車 → 鉄道 20,000kg/列車

坑口の隙間から写した第一通洞内

（３）第一通洞（北口）

・明治 15 年（1882）に開削着手、明治 19 年（1886）に開通した別子銅山初の本格的水平運搬坑道で、南口は東延にある。
・明治 41 年（1908）、嶺南側に短縮坑道が完成し、最終的に延長は 1,021mとなる。
・第一通洞の開削に、他の鉱山に先駆けてダイナマイトを使用。
・第一通洞内運搬は馬引鉱車が主であったが、牛車や人力による運搬も行われた。

立川銅山・大黒間符の雪景色

4　寛永谷（かんえいたに）エリア

（1）大黒間符（だいこくまぶ）

・別子銅山開坑よりも早く寛永年間に開坑されたとされる立川銅山の中では、おそらく最も高地（標高約 1230m）に開削された坑道。
・元禄 8 年（1695）、別子銅山の大和間符（やまとまぶ）と地中にて坑道が抜き合い、境界紛争が勃発した。
・大黒間符の坑口前には、トロッコ用鉄軌道の残骸がある。

坑口の隙間から写した金栄間符内

（2）金栄間符（きんえいまぶ）

・標高約 1180mにある坑口の隙間から見える坑内は、六角柱が支柱として使用されており、江戸期の坑内の様子が見受けられる。
・坑口から数mで、坑道は向かって右に折れている模様。
・『別子開坑二百五十年史話』掲載の写真（露頭に開ける標式的舊間符口）では、金栄間符が被写体になっていると思われる。
※『別子開坑二百五十年史話』の 83 ページに掲載の写真は、“太平坑の上方”と記載されていることからも、金栄間符と推定。

坑口の隙間から写した新都坑内

（3）都間符（みやこまぶ）と新都坑（しんみやここう）

・標高約 1160mにある都間符は、立川銅山時代は、主たる出鉱坑道（本鋪）であった。現在の坑口は、潰れ込みの状態。
・都間符は、宝暦 12 年（1762）の別子銅山による立川銅山併合後は、嶺南の歓喜間符と連絡し、その風廻しとなっていた。
・新都坑は、明治 36 年（1903）に都間符が再開発された際に新たに開削され、地中では都間符と連絡し、明治後期には、出鉱坑道となったと考えられる。坑口前には、トロッコの残骸あり。

寛永谷最大の坑口である新太平坑

（4）新太平坑（しんたいへいこう）

・標高約 1100mの太平坑口は、幅約 3.3m、高さ約 2.8mで、寛永谷最大規模の坑口であり、その下部には、索道停車場がある。
※太東索道（たいとうさくどう）

・型式	玉村単線式
・運搬量	25ｔ/ｈ
・延長	1,373m（新太平坑～東平貯鉱庫）
・高低差	369m
・搬器積載量	260ｋｇ
・設置年月	昭和 10 年（1935）5 月
・廃止年月	昭和 32 年（1957）10 月

寛永谷川流域近くにある新長尾坑

（5）新長尾坑（しんながおこう）

・標高約 1070mにある新長尾坑の坑口は、寛永谷川の流域近くに開削されている。
・新長尾坑は、孔雀石の採掘が行われていた可能性がある。
・標高約 1095mにあった長尾坑と関係している可能性がある。

寛永間符（寛永疏水坑）の雪景色

（６）寛永間符（かんえいまぶ）

・立川銅山時代の正徳元年（1711）に開削着手、安永５年（1776）の貫通時には、住友家による経営となっていた。
・疏水専用坑として開削され、天明８年（1788）からは嶺南にある別子本鋪（歓喜間符・歓東間符）の坑内水の排水も担っていた。
・標高約 1010mにある寛永間符は、寛永谷川の右岸側、流域に隣接した地にあり、川へ疏水するには絶好の位置にある。
※『別子開坑二百五十年史話』巻頭折込にある「旧別子銅山跡」の図には、寛永間符坑口が、何故か川の左岸側に描かれている？

坑口の隙間から写した第二通洞内

（７）第二通洞

・明治 22 年（1889）、標高約 955mの寛永谷から開削が開始された第二通洞は、４番坑道準にて、小足谷疏水坑に連絡する計画であった。
・明治 25 年（1892）、坑口から約 220m進んだ所で激しい湧水のため、開削中止。以後も開削が再開されることはなかった。
・第二通洞内の支柱は、太くて丈夫な木材が使用されている。

寛永谷収銅所の沈殿・濾過池

（８）寛永谷収銅所（かんえいたにしゅうどうしょ）

・寛永谷収銅所は、寛永間符から排出された坑内水処理のため、明治 31 年（1898）に、寛永谷川左岸に設置された。
・明治 38 年（1905）、別子銅山本山の坑内排水は、寛永谷収銅所より下部に位置する第三通洞経由での処理と決定したので、明治 39 年（1906）、寛永谷収銅所は廃止された。
・寛永谷収銅所の沈殿池、濾過池は、石垣とレンガ造りがある。

５　石ケ山丈（いしがさんじょう）エリア

石ケ山丈付近の山斜面を走る牛車道

（１）牛車道（ぎゅうしゃみち・ぎっしゃみち）

・別子近代化起業のひとつが、人力輸送に代わり牛車による大量輸送が可能となる新たな輸送路（牛車道）の開設。
・牛車道は、別子山の目出度町（めったまち）から新居浜口屋へと至る総延長約 28ｋｍの輸送路で、明治９年（1876）に開削着手され、明治 13 年（1880）に全線が開通。
・石ケ山丈付近の牛車道は、現在、石ケ山丈林道として利活用されており、開通当時の面影を残している箇所もある。

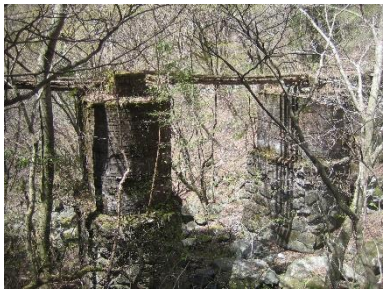
石ケ山丈の索道停車場

（２）端出場（はでば）・石ケ山丈間鉄索道

・明治 24 年（1891）、標高約 160mの端出場と標高約 835mの石ケ山丈間約約 1.6ｋｍを結ぶ複式高架索道が完成し、別子鉱山鉄道上部線敷設工事に係わる資機材の運搬、明治 26 年（1983）の上部鉄道開通後には、鉱石や日用品等の運搬に大活躍した。
・明治 31 年（1898）には、既存の重力式複式高架索道に並行して電気式単式索道が敷設されている。
・明治 44 年（1911）、上部鉄道廃止とともに、当索道も廃止。

石ケ山丈停車場のプラットホーム

端出場水力発電所用の石ケ山丈貯水池


上部鉄道の鉄道橋（唐谷三連橋）

鹿森社宅内のメイン通路

鹿森神社跡地

（３）別子鉱山鉄道上部線の石ケ山丈停車場（駅）

・上部鉄道は、起点を石ケ山丈、終点を角石原とし、総延長は5,532m、明治25年（1892）5月に着工し、明治26年（1893）12月に竣工した。
・上部鉄道の路線は、主に既存の牛車道を付替したもの。
・明治33年（1900）の時刻表によると、約40分をかけて石ケ山丈・角石原間を走り、1日12往復していた。

（４）端出場水力発電所用の石ケ山丈貯水池

・明治45年（1912）に完成した本格的な大発電施設・端出場水力発電所へ落水するための貯水池で、貯水量は約1,150㎥。
・石ケ山丈貯水池へは、嶺南地域を流れる銅山川の水が、日浦通洞、第三通洞を経由して導水され、全容量は47万9,394㎥。
・端出場水力発電所への落差は597.18mで、当時としては日本一であった。（東洋一であったともいわれる。）

（参考）別子鉱山鉄道上部線の唐谷鉄道橋（からたにてつどうきょう）

・明治26年（1893）上部鉄道運転開始時は、機関車2両、貨車15両、客車1両で構成、単線、軌道幅は762mmの軽便鉄道。
・上部鉄道は、明治32年（1899）になると、機関車5両、貨車32両、客車2両となる。
・唐谷三連橋など上部鉄道の鉄道橋は、橋脚と鉄軌道を除き木製であったという記録があるという。
※ドイツ国クラウス社製機関車1両の代価は、6,424円（明治25年）（現在価値試算：1億7,392万8,997円）別掲あり

６　鹿森（しかもり）エリア

（１）鹿森社宅（しかもりしゃたく）

・鹿森地域への入居は大正5年（1916）頃とされ。鹿森社宅は、大正8年（1919）と大正14年（1925）に計281戸が完成。
・昭和時代初期の新居郡の行政区域としては、鹿森社宅は、角野村と中萩村に分かれている。
・鹿森社宅のエリアの中には、小学校鹿森分校、保育所、倶楽部（2階建93坪）、共同浴場（49坪）、生協などがあった。
・東平地域の社宅はトタン屋根だが、鹿森社宅は瓦屋根。

（２）鹿森神社（しかもりじんじゃ）

・社域の「しし岩（猪岩）」から、「しし森（猪森）」さんと言われ、「しし森」が鹿森の語源とされる。
・鹿森社宅の住民にとっての二大行事は、秋の運動会と鹿森神社のお祭り（9月中旬の日曜日開催：神輿巡行）であった。
・鹿森神社の前に土俵があり、毎年、相撲大会も盛大に開催されていた。
・鹿森社宅閉鎖に伴い、大山積神社に合祀されたという。

ドイツ国クラウス社製の蒸気機関車

下部鉄道の芦谷川橋（端出場鉄橋）

下部鉄道の黒石駅プラットホーム

下部鉄道の車屋隧道

鉱山専用鉄道用電気機関車

Ⅱ　金額の推計をしてみましょう　ＰＡＲＴ２

（１）四輪連結タンク機関車

①ドイツ国クラウス社（明治 25 年）6, 424 円
・明治 24 年巡査の初任給　8 円
・令和 4 年愛媛県公安職初任給　216, 599 円
・初任給のアップ率で試算
　@6, 424 円×（216, 599 円÷8 円）＝1 億 7, 392 万 8, 997 円

（２）四輪鉱石車（貨車）

①ドイツ国クラウス社（明治 24 年）561 円 98 銭
・明治 24 年巡査の初任給　8 円
・令和 4 年愛媛県公安職初任給　216, 599 円
・初任給のアップ率で試算
　@561 円 98 銭×（216, 599 円÷8 円）＝1, 521 万 5, 538 円
②大阪汽車製造会社（明治 33 年）545 円 50 銭　　※下部鉄道
・明治 33 年小学校教員の初任給　10 円
・令和 4 年小学校教員の初任給　215, 292 円
・初任給のアップ率で試算
　@545 円 50 銭×（215, 292 円÷10 円）＝1, 174 万 4, 178 円

（３）四輪特別車（客車）

①ドイツ国クラウス社（明治 25 年）1, 626 円
・明治 24 年巡査の初任給　8 円
・令和 4 年愛媛県公安職初任給　216, 599 円
・初任給のアップ率で試算
　@1, 626 円×（216, 599 円÷8 円）＝4, 402 万 3, 746 円

（４）10 トン積鉱石車

①梅鉢車両株式会社（昭和 13 年）3, 354 円
・昭和 12 年公務員の初任給　75 円
・令和 4 年新居浜市職員初任給　182, 200 円
・初任給のアップ率で試算
　@3, 354 円×（182, 200 円÷75 円）＝814 万 7, 983 円

（５）電気機関車（中央運転室型）

①株式会社日立製作所（昭和 25 年）3, 000, 000 円
・昭和 25 年巡査の初任給　3, 991 円
・令和 4 年愛媛県公安職初任給　216, 599 円
・初任給のアップ率で試算
　@300 万円×（216, 599 円÷3, 991 円）＝1 億 6, 281 万 5, 585 円

※上記、別子鉱山鉄道関係の金額は、『別子鉱山鉄道略史』掲載の数値を引用。
※新幹線車両製作費は、１両あたり約 2 億円～3 億円とのこと。

東平小学校跡に建つ銅山の里自然の家（解体前）

耐震補強された端出場水力発電所

端出場水力発電所の内部

国領川改修工事で地形された端出場

四阪島から移築された日暮別邸

（６）私立住友東平尋常高等小学校校舎建設費（474.98 ㎡）

①東平尋常高等小学校校舎建設費（明治 38 年）8,536 円 60 銭

・明治 39 年巡査の初任給　12 円

・令和 4 年愛媛県公安職初任給　216,599 円

・初任給のアップ率で試算

@8,536 円 60 銭×（216,599 円÷12 円）＝1 億 5,408 万 4,918 円

※東平尋常高等小学校校舎建設費は、『角野小学校要覧？』記載の数値を引用。

※新居浜市立別子中学校寄宿舎（木造 2 階建 724.62 ㎡）建設費は、約 2 億 5,000 万円とのこと。

（７）端出場水力発電所総工費

①河水引用工事工費予算書（明治 43 年）672,955 円 74 銭

・明治 44 年公務員の初任給　55 円

・令和 4 年新居浜市職員初任給　182,200 円

・初任給のアップ率で試算

@672,955 円 74 銭×（182,200 円÷55 円）

＝22 億 2,931 万 8,833 円

※河水引用工事実施許可願工費予算書内訳

・発電水路工事費　416,955 円 74 銭

・電気工事費　211,000 円

・測量及び工事監督費　10,000 円

・予備費　35,000 円

※河水引用工事実施許可願工費予算は、『別子銅山の近代化を支えた端出場水力発電所調査報告書』記載の数値を引用。

※東京駅（大正 3 年：1914 竣工）の建設費は、マスコミ報道では、現在価値で約 200 億円とのこと。

（８）国領川（足谷川）改修工事総工費（延長 0.33ｋｍ）

①改修工事方法書（明治 45 年）150,000 円

・明治 44 年公務員の初任給　55 円

・令和 4 年新居浜市職員初任給　182,200 円

・初任給のアップ率で試算

@150,000 円×（182,200 円÷55 円）＝4 億 9,690 万 9,090 円

※改修工事費は、『明治から平成へ－住友と共に六十年－』記載の数値を引用。

※愛知県半田市の二級河川（延長約 3ｋｍ）の河道拡幅、河床掘削、護岸整備等の工事費は、約 54 億 8,000 万円とのこと。

（９）四阪島（しさかじま）海底ケーブル費

①四阪島送電計画起業費（大正 10 年）650,000 円

・大正 9 年巡査の初任給　45 円

・令和 4 年愛媛県公安職初任給円　216,599 円

・初任給のアップ率で試算

@650,000 円×（216,599 円÷45 円）＝31 億 2,865 万 2,222 円

※四阪島送電計画起業費は、『住友共同電力百年史』記載の数値を引用。

別子山・風呂屋谷の住友病院跡地

別子山・黒橋の住友病院別子出張所跡地

惣開町の旧住友別子病院（解体前）

王子町の旧住友別子病院（解体前）

王子町の住友別子病院（新築後）

Ⅲ　別子銅山整理ノート　補遺

（1）住友病院→住友別子病院→別子住友病院→別子病院→住友別子病院

和暦	西暦	住友病院のあゆみ
明治 16 年	1883	私立住友病院開業（別子山村 555 番地 14 番屋敷）
明治 24 年	1891	金子村住友病院開設（金子村旧村上宅）
明治 25 年	1892	金子村住友病院廃止
明治 32 年	1899	私立住友病院開業（金子村 614 番戸）
明治 32 年	1899	別子山の病院を出張所とする　（本院は金子村）
明治 33 年	1900	住友病院別子出張所を元鉱業所別子出張所跡に移転
明治 38 年	1905	住友病院四阪島出張所開業
明治 38 年	1905	住友病院東平出張所開業
大正元年	1912	住友病院別子出張所院舎新築落成移転
大正５年	1916	住友病院別子出張所廃止
大正６年	1917	住友病院端出場診療所開業
大正 10 年	1921	私立住友病院より私立住友別子病院となる
大正 14 年	1925	住友別子病院筏津診療所開業
昭和３年	1928	私立住友別子病院より私立別子住友病院となる
昭和６年	1931	別子住友病院山根分院開業
昭和 21 年	1946	私立別子住友病院より別子病院となる
昭和 31 年	1956	別子病院より住友別子病院となる
昭和 41 年	1966	住友別子病院山根分院廃止
昭和 43 年	1968	住友別子病院東平分院廃止
昭和 48 年	1973	住友別子病院筏津診療所廃止
昭和 48 年	1973	住友別子病院端出場診療所廃止
昭和 61 年	1986	住友別子病院四阪島診療所廃止

※住友別子病院は、現在も地域の中核医療機関として開業中

（2）販売所、配給所、別子生協、百貨店等

和暦	西暦	販売所、配給所、生協、百貨店等のあゆみ
明治 38 年	1905	別子鉱業所四阪島販売所開設（美の浦埋地）
大正６年	1917	別子鉱業所調度課販売所開設（惣開）
昭和５年	1930	住友別子鉱山㈱山根配給所開設
昭和 25 年	1950	別子百貨店開設（㈱別子百貨店創立）
昭和 26 年	1951	別子百貨店が別子大丸と改称（㈱別子大丸創立）
昭和 31 年	1956	鹿森生協開設
昭和 32 年	1957	新田生協開設
昭和 33 年	1958	東平生協開設
昭和 34 年	1959	四阪島生協開設（四阪島販売所を整理）
昭和 35 年	1960	立川生協開設
昭和 37 年	1962	山根生協開設（山根配給所を整理）
昭和 50 年	1975	別子大丸が新居浜大丸と改称
平成 13 年	2001	新居浜大丸閉店

鹿森記念碑

鹿森共同浴場（男湯）

鹿森社宅の荘厳な石垣

鹿森社宅のかまど、炊事場の遺構

鹿森の語源「ししもり」「しし岩」

・鹿森青年倶楽部建屋跡地前に、彫がある石柱が残っている。
　「國光　鹿森青年団設立十五周年記念　昭和七年十一月建設」
・石柱の建設日から、鹿森青年団は、鹿森開拓、入居開始、鹿森社宅完成といった集落形成初期には、既に設立されている。

（3）小学校鹿森分教場・分校（小学１年生～小学３年生）

和暦	西暦	鹿森分校のあゆみ
大正６年	1917	私立住友惣開尋常高等小学校鹿森分教場創設
昭和 10 年	1935	校舎改築
昭和 16 年	1941	私立東平学校鹿森分教場と改称
昭和 17 年	1942	私立住友初等学校鹿森分教場と改称
昭和 22 年	1947	井華東平小学校鹿森分教場と改称
昭和 24 年	1949	財団法人別子学園東平小学校鹿森分教場と改称
昭和 29 年	1957	財団法人別子学園東平小学校鹿森分校と改称
昭和 36 年	1961	新居浜市立東平小学校鹿森分校と改称
昭和 43 年	1968	新居浜市立角野小学校鹿森分校に改称
昭和 45 年	1970	新居浜市立角野小学校鹿森分校閉校

・私立時代の卒業生　男 753 人、女 687 人、計 1,440 人
・昭和 16 年（1941）　私立惣開小学校公立移管
・昭和 24 年（1949）　在校生 109 人（3 学級）
・昭和 43 年（1968）　新居浜市立東平小学校閉校
・昭和 45 年（1970）　閉校時の在学生 2 年生 2 人は、本校へ編入

◎「鹿森」の地名の由来

鹿森（大永山 619 番地～644 番地）（646 番地～687 番地）

別子銅山を語る会の記録によると、寛政の頃、この地方の滝本家は中屋敷というところに居て、多くの山林と山畑を持っていた。甚右衛門が組頭になると殺生を禁じ、部落では、猪垣を作り、おとし穴を作り、鐘や太鼓でハヤシ、猪の防禦につとめた。

彼が 50 才、寛政 12 年（1800）の 11 月の終りごろ、日課の山や畑の巡視の時、突然木々の間に異様な物を発見した。動かない猪である。よく調べてみると、いのししの岩であった。

これより、「ししもり」「しし岩」といい、先祖代々射止めた猪の魂をなぐさめに「しし祭り」を行い、豊年を祈った、とある。

この地に、住友社宅が建設され、鹿森と書き「しかもり」といい、鹿森社宅（しかもりしゃたく）、鹿森ダム（しかもりだむ）、と呼んでいるが、角野地域の人は、今でも鹿森のことを「ししもり」と呼ぶ人が多い。

昭和 55 年 3 月 1 日発行
新居浜市教育委員会編集兼発行『地名の由来　新居浜』より

銅山川左岸にある筏津西走坑

現在、唯一入坑可能な筏津東走坑の内部

円通寺（南光院）対岸にある余慶坑

積善坑（本坑）

積善鉱床で最高地にある積善斜坑

（4）別子銅山本山鉱床以外の稼行鉱床

①筏津鉱床（いかだづこうしょう）

・稼行年代　明治 11 年（1878）～昭和 48 年（1973）
・露頭位置　海抜 660m～810m
・構成鉱物　黄鉄鉱、黄銅鉱など
・出鉱実績　鉱量　　2,430,000 トン
　　Ｃｕ　　1.60%
　　Ｃｕ量　38,800 トン
・残 鉱 量　鉱量　　719,000 トン
　　Ｃｕ　　1.17%
　　Ｃｕ量　8,400 トン
・主な坑口　弟地坑、筏津西走坑、筏津東走坑、筏津第一斜坑

②余慶鉱床（よけいこうしょう）

・稼行年代　大正 6 年（1917）～昭和 40 年（1965）
・露頭位置　海抜 760m～800m
・構成鉱物　黄銅鉱、斑銅鉱など
・出鉱実績　鉱量　　266,000 トン
　　Ｃｕ　　1.62%
　　Ｃｕ量　4,300 トン
・残 鉱 量　鉱量　　－
　　Ｃｕ　　－
　　Ｃｕ量　－
・主な坑口　余慶坑（旧坑）、余慶坑（本坑）

③積善鉱床（せきぜんこうしょう）

・稼行年代　大正 7 年（1918）～昭和 35 年（1960）
・露頭位置　海抜 660m～720m
・構成鉱物　黄鉄鉱、黄銅鉱、斑銅鉱など
・出鉱実績　鉱量　　67,000 トン
　　Ｃｕ　　1.64%
　　Ｃｕ量　1,100 トン
・残 鉱 量　鉱量　　－
　　Ｃｕ　　－
　　Ｃｕ量　－
・主な坑口　積善坑（本坑）、積善斜坑、零番建入

※坑口名の中は、正式名称が不明のため仮称扱いがある。

住友金属鉱山株式会社発行『別子鉱床群の地質と鉱床』では、以上の他にも、稼行実績はないが、清水滝（きよたき）、日浦、奥窯、大山、金鍋（かんなべ）、綱繰（つなぐり）、大座礼（おおざれ）、桜平（さくらなる）等々多数の露頭、旧坑群があると記載されている。